



紀平真理子のオランダ通信

第6回

フリースランドの酪農家訪問記(2)

プロフィール

1985年、愛知県名古屋生まれ。南山大学外国語学部スペインラテンアメリカ学科卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてにおいて実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。

オランダの2009年の飼料生産を調べると、牧草サイレージが51万4000t、デントコーンサイレージが389万3000t、干し草が21万8000t（いずれも乾燥状態での収穫高）と、15年前に比べ青刈りトウモロコシの収穫高が著しく上昇していた。これは、青刈りトウモロコシが高エネルギーでサイレージ適性を備えるとともに、風土に合って安定した収穫が見込めることから、70年ごろより作付面積が拡大しているためだ。11年の耕地面積は、青刈りトウモロコシが22万7800ha、牧草地が17万2300ha、アルファルファが6400haだった。

Harsma農場も自家用に15haの青刈りトウモロコシ畑を保有している。4月に播種、9月末ごろに収穫して飼料にする。近隣には風力発電とトウモロコシを使ったバイオエネルギー事業に参入し、規模を拡大している酪農家もあるそうだが、同農場のDunneはあくまで本来の「必要な飼料を自分たちで作り、乳牛を育てる」というスタイルを貫きたいと話す。

同農場では、青刈りトウモロコシや牧草、大豆、ミネラルを配合した飼料と、CVR社（注・同国のアーネム市にあり、3000の酪農家か

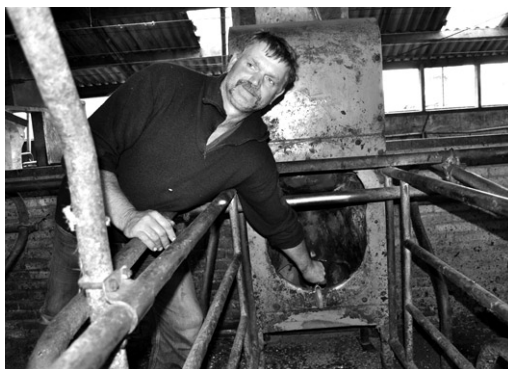
らなる酪農家のための国際企業）のVeemanagerというシステムを使用した濃厚飼料で育成している。このシステムは、ネックレス（注・牛ごとに異なる濃厚飼料の必要量をあらかじめパソコンで入力する）をかけた牛が給餌スペースに進むとその牛に必要な分だけの餌が供給されるもの。牛が食べた量を把握、管理でき、食欲がなければ早めに病気を疑うことも可能だ。

一方、同国の生乳の生産量については1162万6000t、乳製品が52万6600tでいずれも増加し続けている。1頭当たりの年間搾乳量は8075kgで、75年の2倍になる。脂肪分は4・41%、プロテイン含有量は3・48%である。このような正確なデータがわかるのは前述のCVR社の功績による。

Harsma農場では1日2回、ミルクステーションを用い、20頭ずつ225ℓを搾乳している。温度調節され、タンク内に保管された生乳は週に3回、業者が回収に来る。また、6週間に一度、CVR社の職員が訪問、1頭当たりの搾乳量を計測し、それぞれの牛の生乳をサンプルとして持ち帰る。その後、すべての牛の生乳の脂肪分やプロテイン量などの情報が生産者にフィードバックされ、それをもとに給餌のスケジュー



自家製デントコーンサイレージ（上）と牧草サイレージ。



Veemanagerに牛がかけたネックレスを近づけると、その牛に必要なだけの濃厚飼料が供給されてくる。

ルを練り直す。「オランダの農業ITシステム」と聞くと、機械的、管理的というイメージがし、生産者としての勤が働かなくなるのではと懸念するだろう。しかし、現実には機械やシステムに頼り切っているわけではなく、あくまで何かを決定する際の「人が論理的に考え、判断できるようにシステムを使って証拠集めを行なう」といった解釈が正しいかもしれない。